



2010年3月25日発行 通巻第108号  
発行 佐賀県 西松浦郡 有田町 黒牟田 しん窯青花  
電話 0955-43-2215 FAX 0955-43-2889  
URL <http://shingama.com/shingama.html>  
E-Mail Address [shingama@po.saganet.ne.jp](mailto:shingama@po.saganet.ne.jp)  
発行責任者 梶原茂弘

## — 第一百八号 —

(2010年春号・展覧会観賞報告特集号)

### 佐賀県立佐賀城本丸歴史館開館5周年記念特別展

(2010年1月1日～2月14日)

特別展近代との遭遇—世界を見る・日本を創る—が、新年早々開かれました。幕末・維新期の歴史の紹介と江戸時代と共に佐賀藩が出展した世界万国博覧会の出展品などが所狭しと並べられ、まるで有田焼の近代のあけぼの展かと思間違えるような迫力ある展示会でした。

中に染錦花鳥図大皿(有田・梶原菊三郎・梶原友太郎・香蘭社 伝・明治11年(1878)有田町蔵)があり、ていねいな解説文が添えてありました。私は一言一句読みながら、私の先祖梶原家2代・3代の大傑作を前にして、高揚する気持ちをおさえる事ができませんでした。もっと先達に学んで、後世に名を残すやきものを創らなければと思った、見応えのある展覧会でした。

### 原榮三郎回顧展

(2010年2月23日～28日)

有田で生まれた奇才原榮三郎氏(1935年～2004年)の回顧展が、焱の博記念堂コンベンションホールで開かれました。氏は有工図案科出身で、写真・グラフィックデザイン・陶芸と多岐にわたり、現代アートの第一人者として有田へ新しい風を吹き込んでいました。私達の青年時代に11p.m.というテレビ番組のレギュラーとして出演し、藤本義一氏と軽妙な芸術文化論をかわしていた姿を懐かしく思い出します。有田にアートを根付かせ、伝統と革新のバランスでやきものデザインに新風を、と訪れる度に熱く話して下さっていました。

黄色と赤とピンクを基調にした垂れ幕が、春の陽を受けてより鮮明に輝いていて印象的でした。大きな展覧会場だからこそ生かされる、原榮三郎氏ならではの迫力なパフォーマンスでした。

## 有田窯業大学24期生卒業制作展

(2010年2月23日～28日)

1985(S.60)年開校した有田窯業大学校も、今年26期生を迎えました。すでに昨年から4年制大学になっていますので、2009(H.21)年入学した25期生は、3年後2013(H.25)年が卒制展にあたります。つまり、短大では最後の卒制展でした。

柿右エ門校長の講評を聞きながら、九州陶磁文化館へ見学に行きました。今の学生さんは、人間国宝の校長先生から直に講評を聞き、九陶という大舞台で自分の分身ともいえる作品を発表できる幸せに感謝しているだろうか、とふと思いました。作品については、400年の伝統にとらわれない自由奔放な作品群が多く戸惑いましたが、面白く見せてもらいました。これからの日本の伝統産業であるやきものに、日本いや世界のどこかで携わっている若者達の姿を想像するだけで、痛快に思いました。全員有田に残って欲しいと願うものの、求人を出せない産地の不甲斐なさもあって、自分自身が恥ずかしくなりました。しん窯も窯大や有工の金の卵を取り逃しているの、1日も早く求人票を出せる窯へ変身しなければと思いつつ、会場を後にしました。

## 伊万里・有田焼伝統工芸士会作品展

(2010年3月2日～7日)

今年はじめて佐賀県立美術館で開かれました。去年までは佐賀県立九州陶磁文化館で行われていましたが、来年伝統的工芸品月間全国大会を佐賀・有田へ誘致しようという狙いで、県にも働きかけて実現できたようです。

伝統的工芸品産地は47都道府県にまたがり、指定品目数は211に及びます。伝統工芸士と言われる人も、現役で4,580人を数えます(2009(H.21)4.28現在)。全国大会を開く受け皿づくりは、箱物を含めて整備が必要です。しかし有田は100回を超える陶器市を体験し、1日10万人以上を吸収してきた実績とパワーがあります。どんな大型イベントにも耐えられる情熱と創意工夫があります。伊万里・有田焼伝統工芸士会を中心に、産官民あげて大事業に参画したいものです。伊万里・有田は職人の町です。次代を担う職人さんを育てる事は、私達に与えられた使命であると思います。作品展のDMを眺めながら、まもなく訪れる2016年400年祭に思いをはせていました。



藤井陽滋



橋口博之



角 康則

## 陶交会九陶年次展

(2010年3月16日～22日)

有田陶交会は窯元二世の集団です。2年後には60周年を迎えます。その陶交会展が25回目の作品展を開いています。テーマは「先人にならうー有田焼400年祭にむけて」です。ポスターも一新され、一見してテーマを理解することができます。自然への感謝の気持ち、手仕事の伝承、街の移ろいなど、ポスターから窯やきの人生観や哲学を読み取れて、おもしろいと思いました。作品がポスターに負けていたようで、奮起しなければとつくづく思った展覧会でした。

## 橋口博之作陶展 ～いぶき～

(2010年3月17日～23日)

しん窯専務で認定伝統工芸士の橋口が、8回目の作陶展を日本橋三越本店で開きます。その前に3回玉川高島屋でお世話になりましたので、今回で東京展は11回目になります。

毎年来場者も増えて、お客様の声を生かした新作を並べるように心がけているようです。作家はお客様の支えや応援によって育っていきます。今年は今までのお客様と会えるだろうか、とか、新しいお客様との出会いはあるのだろうか、と不安と期待が錯綜して初日を迎えます。

たくさんのお客様のお越しをお待ち申し上げております。



## 春の特別企画展 十一代今右衛門展

(2010年3月18日～7月25日)

上記の展覧会の案内状をいただきました。現在は十四代ですから、曾祖父の器の世界展です。下記は、案内状から抜粋させていただきました。

明治以降、今泉今右衛門の家業としては十代、十一代、十二代と三代かけて、最盛期・色鍋島の復興に努め、昭和46年国の重要無形文化財保持団体の指定を受けるなど、現代の今右衛門窯の基礎を築きました。特にその中でも昭和初期の十一代の頃は、各宮家からのご注文を受けるなど、江戸期の鍋島・古伊万里を基にした器の数々が制作され、その技術の高さは、当時から高い評価を受けていました。

また、この企画展に併せ本年秋には、「十一代今右衛門展 Part. II 飾物の世界」として高台皿から置物にいたる作品をご紹介します。春秋一年通して十一代今右衛門の崇高な技術の世界を堪能していただければ幸いに存じます。

## これからの展覧会予定

- ・ パリに咲いた古伊万里の華 4月6日～6月13日 (九州国立博物館にて)
- ・ 九州山口陶磁展 4月29日～5月10日

## 職人さんのひとりごと

～第22回・杉山幸子さん～

普段は、事務所で世話になっています。

今回は「2010年しん窯春の陶器市」のPRをいたしたいと思います。

今年も4月28日(水)より5月5日(水・祝)までの8日間、弊窯にて開催いたします。「新型ポット(急須)」をはじめとする新作、定番商品、お買い得商品を含め、みなさまをおもてなしすべく、スタッフ一丸となり準備を着々と進めています。

お誘い合わせの上、ゴールデンウィークの行楽を兼ねてぜひお出かけ下さいませ。

なお、期間中会場のどこかに私がおりますので、(特典はございませんが)ぜひ声をかけて下さい!

